

野尻町文化財調査報告書第1集

SIN MURA
新 村 遺 跡

TAKA YAMA
高 山 遺 跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

1986.3

宮崎県西諸県郡
野尻町教育委員会

野尻町文化財調査報告書第1集

SIN MURA
新 村 遺 跡

TAKA YAMA
高 山 遺 跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

1986.3

宮崎県西諸県郡
野尻町教育委員会

序

野尻町教育委員会は、漆野原は場整備事業にともなう遺跡発掘調査を、昭和60年度に新村・高山で実施しました。本書は、その概要を報告するものです。

埋蔵文化財の発掘調査は、永い間眠り続けていた遺跡に、学術的なメスを加え、科学的な解明と保存措置を講ずることを目的にしていますが、ふる里の先人の生活を偲び、歴史のロマンを求める事業でもあると考えます。

本年度の調査から、縄文時代、旧石器時代の土器や石器も多量に出土し、1万年以上も前から先人がこの地に住み、生活していたことが明確になりました。今後の貴重な研究資料を得ることができました。

調査は今後継続して城原地区でもとりくみますが、紙屋東部地区に生きた先人や地域社会の歴史を語り合い、将来へ向けての個人や社会に思いをめぐらすことも、重要なことだと思われます。本書がそのための資料となれば幸いです。

この調査のために、御指導、御協力いただきました県教育委員会文化課の皆様や、御理解御協力の大淀川下流土地改良事務所・漆野原土地改良区の皆様をはじめ、関係各機関・各位に心から御礼を申し上げます。

昭和61年3月

野尻町教育委員会

教育長 今吉忠義

例　　言

1. 本書は、漆野原県営は場整備事業に伴い野尻町教育委員会が、実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は昭和60年10月17日から12月20日まで実施した。
3. 調査関係者は次の通りである。

調査主体 野尻町教育委員会 教育長 今吉忠義
課長 梶長弘
課長補佐 佐国武正廣
文化財担当 脇村一也

調査員 面高哲郎（県教育庁文化課主任主事）

日高孝治（県教育庁文化課主事）

4. 本書の執筆は第1章1は脇村が担当し、その他は日高が担当した。
5. 本書の編集は日高が行った。
6. 本報告の方針は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。

本文目次

第1章 序説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と歴史的環境	1
第2章 調査の概要	4
1. 新村遺跡	4
2. 高山遺跡	12
第3章 まとめ	21
付篇 「野尻町新村遺跡における土壤調査成績書」	24

挿図目次

第1図 野尻町遺跡位置図	3
第2図 新村遺跡土層断面図	4
第3図 新村遺跡発掘区全図	5
第4図 新村遺跡位置図	5
第5図 新村遺跡集石実測図	6
第6図 新村遺跡遺物出土状況図（縄文時代）	7
第7図 新村遺跡出土土器実測図・拓影	9
第8図 新村遺跡出土石器実測図（縄文時代）	10
第9図 新村遺跡遺物出土状況図（旧石器時代）	11
第10図 新村遺跡出土土器実測図（旧石器時代）	11
第11図 高山遺跡発掘区全図	13
第12図 高山遺跡土層断面図	13

第13図	高山遺跡位置図	13
第14図	高山遺跡遺物出土状況図（縄文時代）	15
第15図	高山遺跡 6号集石実測図	15
第16図	高山遺跡 1号集石実測図	15
第17図	高山遺跡出土土器実測図・拓影(1)	17
第18図	高山遺跡出土土器実測図・拓影(2)	18
第19図	高山遺跡出土石器実測図	19
第20図	高山遺跡 8号集石実測図（旧石器時代）	20

図版目次

- 図版1 新村遺跡遠景（東から）・新村遺跡発掘区全景（北から）
- 図版2 新村遺跡土層断面・新村遺跡1号集石
- 図版3 高山遺跡土層断面・高山遺跡1号集石
- 図版4 高山遺跡6号集石・高山遺跡8号集石
- 図版5 新村遺跡出土土器
- 図版6 高山遺跡出土土器(1)
- 図版7 高山遺跡出土土器(2)
- 図版8 新村・高山遺跡出土石器

第1章 序 説

1. 調査に至る経緯

宮崎県西諸県郡野尻町において、昭和56年度から漆野原地区の県営ほ場整備事業が行われている。それにより、事業区内の埋蔵文化財の調査として分布調査、昭和60年2月に昭和60年度事業区内の試掘調査が県文化課によって行われた。

調査により事業区内に2ヶ所の遺跡の存在が判明したため、大淀川下流土地改良事務所、漆野原土地改良区、県文化課、町教育委員会の4者で埋蔵文化財の保護について協議が行われたが、事業施行上現状保存が困難な部分があり、その記録保存の措置がとられることになった。これらの遺跡については所在地に因る高山・新村の遺跡名が付され、調査は、野尻町教育委員会が主体となり、県文化課日高孝治主事の担当で昭和60年10月17日から12月20日まで発掘調査が行われた。

2. 遺跡の位置と歴史的環境

野尻町は宮崎県のほぼ中央部に位置し、北を須木村・綾町、南を高原町・高城町、東を高岡町・西を小林市と接している。当町は、大淀川の支流である岩瀬川の北岸に広がっており、町域は南北に約6km、東西に約18kmと東西に細長い形を呈している。地形的には、九州山地の南端部と鰐塚山系の北端部が接する地点である。町内には沖積低地があまりなく、岩瀬川の支流によって開析された丘陵性台地と谷が入り組んだ複雑な地形を呈している。

今回調査を行った、新村・高山遺跡も、町西部を流れる秋社川によって開析された相対する台地の縁辺部に立地している。

また町内には「全国遺跡地図」等によれば現在30ヶ所の遺跡が確認されている。
(第1図) これらの遺跡を時代順に概観してみると、旧石器時代の遺跡については今まで確認されていなかったが、今回の発掘調査において新村遺跡(1)でナイフ形石器が出土し、高山遺跡(2)では集石遺構が確認されており、厚く堆積した火山灰層のために発見されずにいる遺跡が相当数存在するものと思われる。また大平山付近の断面からも、旧石器時代の層と思われる所から焼石が出土することが確認されている。

縄文時代においては、早期の集石遺構の発掘調査が行われた梯遺跡⁽¹⁵⁾や県内で数少ない縄文時代前期の曾畠式土器が出土している柿川内遺跡⁽³⁰⁾⁽⁴⁾などが知られている。町内にはこれらの遺跡と同様な立地を示す地点が数多く存在しており、遺跡の存在が考えられる。

弥生時代には、大萩遺跡において後期の竪穴住居跡や土坑墓群が発掘調査されており、免田式土器など数多くの貴重な資料が出土している。

古墳時代においては、竪穴住居跡等、生活址の検出はないが、県指定史跡である大萩古墳や九塚古墳が存在しており、古墳の周辺には古墳時代の南九州独特の墓制である地下式横穴墓が存在しており、今までに數基発掘されている。⁽⁵⁾また、東麓切畑においても地下式横穴墓の発掘調査が行なわれている。⁽⁶⁾

また歴史時代であるが、古代においては、延喜式に記載されている日向国十六駅のうち野後駅の比定地であり古代の官道が通っていたと思われる。中世には、伊東氏・島津氏の抗争の場として登場しており、町内には伊東48城の1つである野尻城や紙屋城をはじめとしていくつかの山城址が存在する。また有形文化財ではあるが、東麓の石窟仏（県指定）（鎌倉時代）も当時の文化を知る上で貴重な資料である。

また江戸時代（近世）のものでは、漆野原一里塚（県指定史跡）や紙屋関所跡などがあり古代以来の交通の要衝としての野尻町の存在を感じさせるものがあり、同時にその頃の遺跡も多く存在しているものと思われる。

1. 新村遺跡
2. 高山遺跡
3. 堀切遺跡
4. 清野原遺跡
5. 真幸田遺跡
6. 秋社洞穴遺跡
7. 立神遺跡
8. 紙屋城跡
9. 星柳遺跡
10. 池ノ原遺跡
11. 今別府遺跡
12. 萩ノ茶屋遺跡
13. 戸崎城跡
14. 勝負遺跡
15. 梯遺跡
16. 平木場遺跡
17. 吉村A遺跡
18. 吉村B遺跡
19. 切畑遺跡
20. 九塚古墳
(県指定史跡)
21. 野尻城跡
22. 大笠遺跡
23. 大脇遺跡
24. 猿瀬I遺跡
25. 猿瀬II遺跡
26. 钤松遺跡
27. 三ヶ野山遺跡
28. 大沢津遺跡
29. 大萩古墳
(県指定史跡)
30. 柿川内遺跡

参考文献 日高次吉 「宮崎県の歴史」 吉川弘文館 昭和45年

石川恒太郎「宮崎県の考古学」 ◇ 昭和43年

野尻町教育委員会「野尻町の文化財」 ◇ 昭和57年



第2章 調査の概要

1. 新村遺跡

遺跡の立地と概要

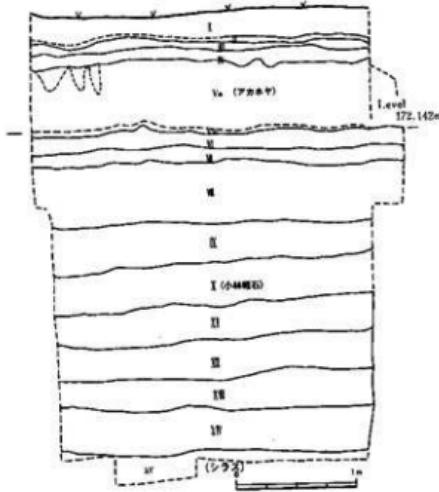
新村遺跡は、野尻町大字紙屋字新村に所在する。秋社川の支流によって開析された東に延びる丘陵性台地の南側縁辺部に位置する。標高は約175mで、川面からの比高差が約20mである。高山遺跡とは谷を挟んで南へ850mの所に位置する。

新村遺跡の調査区は、前年度の試掘調査の結果に基き協議を行った結果、本遺跡内を通る農道部分について行なわれることとなった。そのため調査区は南北に約100m、東西に約5mと細長いものとなった。

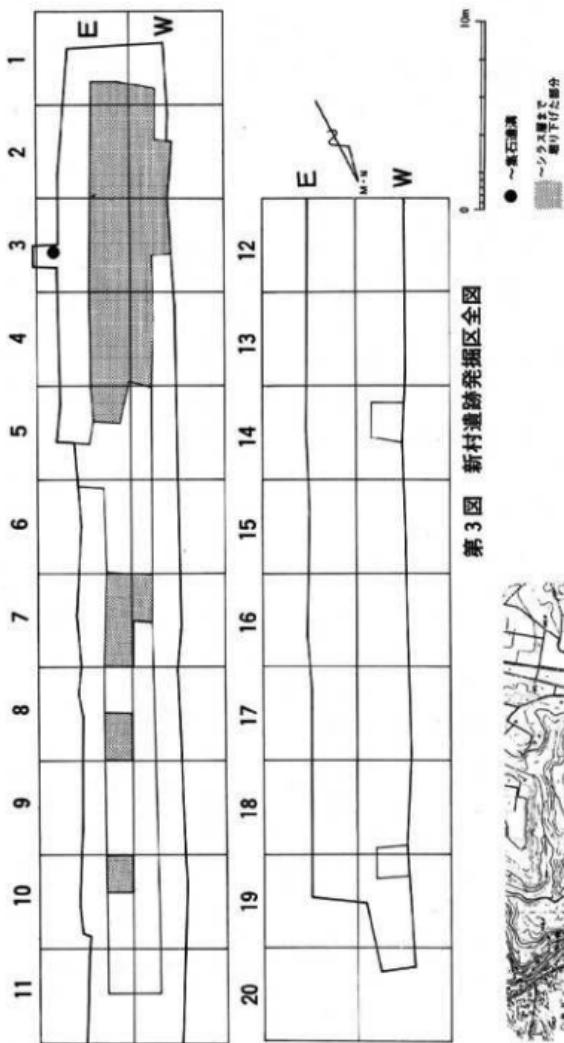
調査は、まず最初に試掘調査の結果、無遺物層と判断されるアカホヤ層及びその直下の牛のすねローム（通称・カシワバン）まで重機による掘り下げを行った。その後、調査区中央を縦断する形で5m×5mのグリッドを設定し、南より1・2・3……区とし東をE区西をW区として、人力による掘り下げを行った。

その結果、調査区は中央部がやや低くなってしまっており、南半部分に遺物の集中が見られた。遺構としては縄文時代早期の集石遺構を1基確認した。遺物としては、押型文土器や石鐵等が出土した。

また縄文時代の調査と並行して下層の状態を確認するため、2m×2mのトレーナーを設定し掘り下げを行った所、シラス（A.T.）層の直上にやや黒褐色を帯びた土層が存在しており、



第2図 新村遺跡土層断面図



第3図 新村遺跡発掘区全図



第4図 新村遺跡位置図

剝片・焼石が出土し、旧石器時代の包含層が存在することが判明した。そのため、縄文時代の包含層の調査終了後、調査区南半部分について重機による掘り下げを行い、旧石器時代の調査を行った。

その結果、1区～3区に遺物の集中が見られ、ナイフ形石器・スクレイパー等の石器とともに剝片・焼石が百数十点出土した。遺構は検出できなかった。

包含層の状態

新村遺跡の基本層序は第2図に示す通りであり第Ⅰ層の耕作土（水田面）から第Ⅳ層のシラス（A.T.）層まで確認できた。この中には大きく、シラス（Ⅳ層）・小林軽石（Ⅹ層）・アカホヤ（V層）の3種類の火山噴出物の堆積がみられ、その間にローム層が存在するという状態であった。

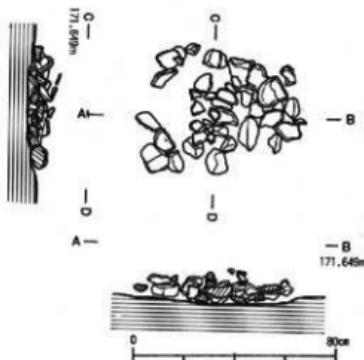
その中で、アカホヤと小林軽石の間の第Ⅸ層に縄文時代早期（押型文土器）の包含層が存在し、また小林軽石とシラスの間の第Ⅷ層下部から第Ⅶ層上部にかけて旧石器時代（ナイフ形石器）の包含層が存在していることが確認された。

詳細な土層観察については、宮崎県総合農業試験場の有村玄洋・赤木康両氏の行なわれたものがあるので後記する。

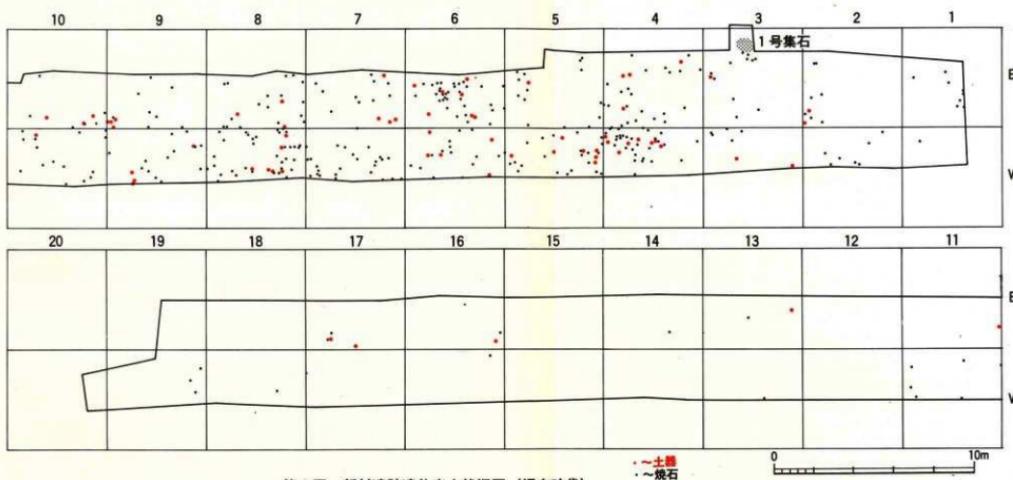
縄文時代

縄文時代の遺構・遺物は全てアカホヤ下位の第Ⅸ層を中心に出土した、遺物の出土分布は第6図でみられるように調査区の南半部分（1～11区）に集中しており、遺跡の広がりは調査区南半部分の周辺にあるものと思われる。

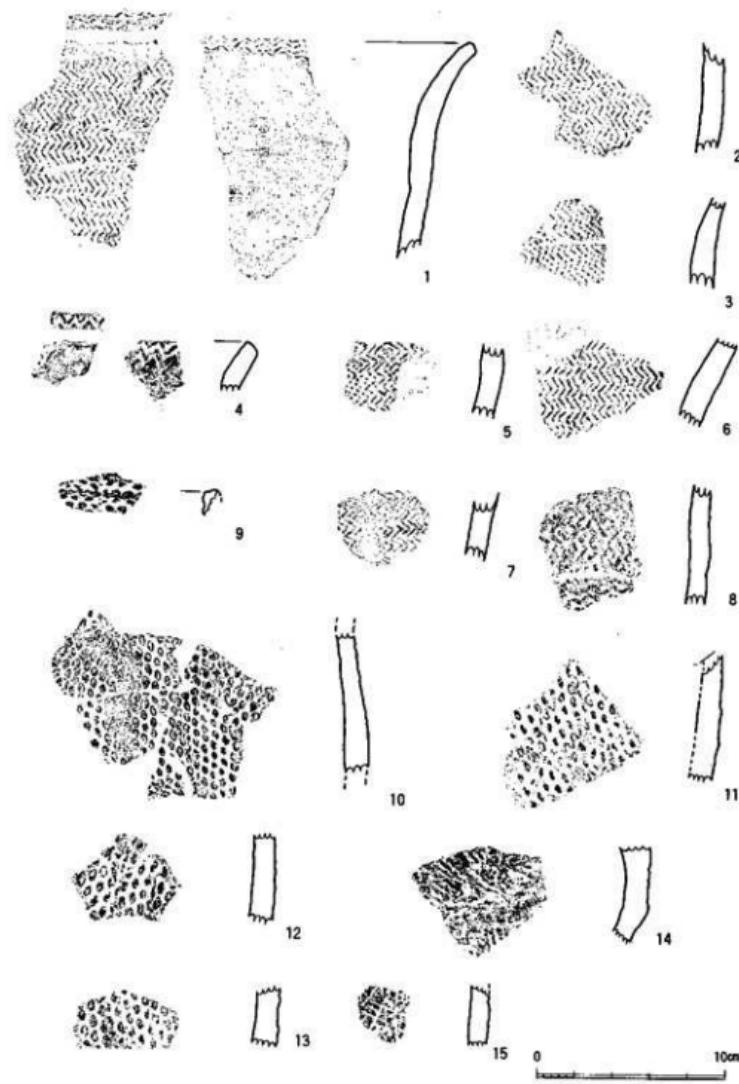
遺構としては3-E区において集石遺構が1基検出された。この集石遺構は調査区に半分かかった状態であったためその部分だけ調査区を拡張して検出した。プランは60cm×50cmで、火を受けたと思われる赤変した礫によって構成されている。焼土面および掘り込みは存在せず



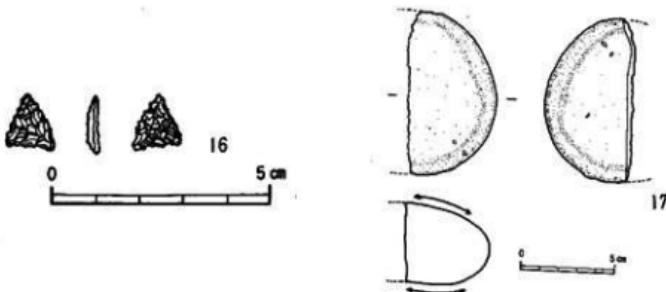
第5図 新村遺跡集石実測図



第6図 新村遺跡遺物出土状況図（縄文時代）



第7図 新村遺跡出土土器実測図・拓影



第8図 新村遺跡出土石器実測図（縄文時代）

配石等も見られなかった。集石内より若干の炭化物と押型文土器が出土した。

遺物としては、集石遺構の周辺から11区にかけて焼石とともに、土器や石器が出土している。全体の出土量はあまり多くないが、縄文時代早期の押型文土器を主体として撚糸文や条痕文が少量出土している。石器としては磨石・石鎌等が出土している。

1～8（第7図）は山形押型文土器である。外面に山形押型文を縦走させるタイプで、口縁部が外反し、胴部が若干膨らむ器形を呈する。1・4は口縁部片で口唇部および口縁部内面に山形押型文を横走させている。色調は概ね黄橙色を呈し、焼成は良好である。1～7はしっかりした山形文を呈するが、8はややくずれた状態である。なお、文様や胎土から1～3は同一個体と考えられる。

9～13は隋円押型文土器である。外面に隋円押型文を縦走させるタイプで、9は口縁部片で山形押型文同様口唇部および口縁部内面に隋円押型文を施すものである。色調は橙色～褐色を呈し、焼成は良好である。文様からみて11～13は同一個体と考えられる。

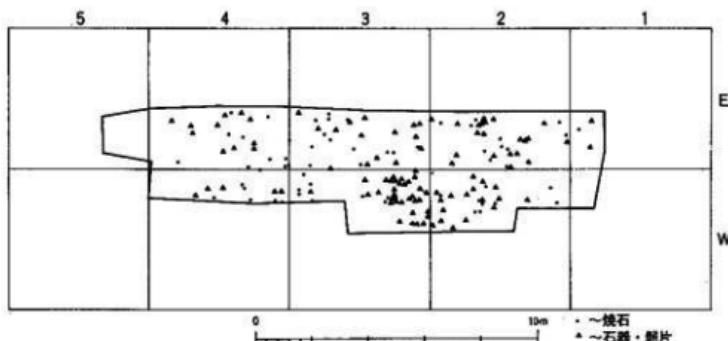
14は撚糸文土器である。胴部屈曲部の外面に撚糸文を施している。色調は浅黄橙色を呈し焼成は良好である。15は細沈線文土器の破片であろうと思われる。色調は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

16は黒曜石製の石鎌である。抉りはあまり顕著ではなく、やや不定形を呈している。15区出土である。17は磨石で、本遺跡に多く出土する砂岩ではなく火成岩の一種であると思われる。

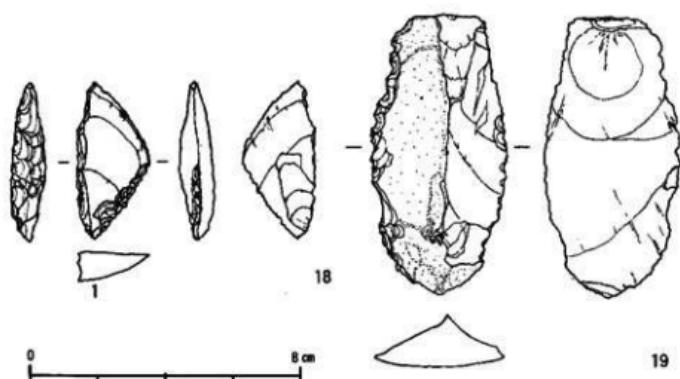
旧石器時代

旧石器時代の遺物はシラス層の直上にあたる第Ⅴ層を中心に出土した。遺物としては、流紋岩製の石器・剝片および砂岩の焼石が出土した。1~4区において遺物の集中が見られ、その中でも第9図に示されるように2・3区に石器および剝片の集中が見られた。なお、遺構は確認できなかった。

18は二側縁加工のナイフ形石器である長さ4.6cm、幅2.1cm、厚さ0.8cmを計る。19は、自然面を残した剝片に二次加工を施したスクレイパーである。長さ8.2cm、幅3.9cm、厚さ1.5cmを計る。18・19ともに流紋岩製である。



第9図 新村遺跡遺物出土状況図（旧石器時代）



第10図 新村遺跡出土石器実測図（旧石器時代）

2. 高山遺跡

遺跡の立地と概要

高山遺跡は、野尻町大字紙屋字高山に所在する。新村遺跡と同様に秋社川によつて開析された丘陵性台地の縁辺に位置しており、標高は約170mで、川面からの比高差は約15mである。新村遺跡とは谷を挟んで北へ850mの所に位置する。

本遺跡は周辺の畑からの表探により縄文土器等が確認されて遺跡であることが判明した。

今回の調査区は、現在道路として使用されている面と1部畑にかかる部分について行った。まず、2m×5mのトレンチを設定し掘り下げを行った所アカホヤ上層より遺物等が確認されずまた道路面にはアカホヤが存在していないことが判明したので、畑部分についてはアカホヤまで道路部分については発乱層について重機による掘り下げを行った。

調査区は新村遺跡同様、南北に約50m、東西に約7mで南北に長いため調査区中央に杭を打ち5m×5mのグリッドを設定し、グリッドごとによる掘り下げを行つた。

その結果アカホヤ下層より縄文時代早期の集石遺構7基と押型文土器を中心とする土器群と石器等が出土した。

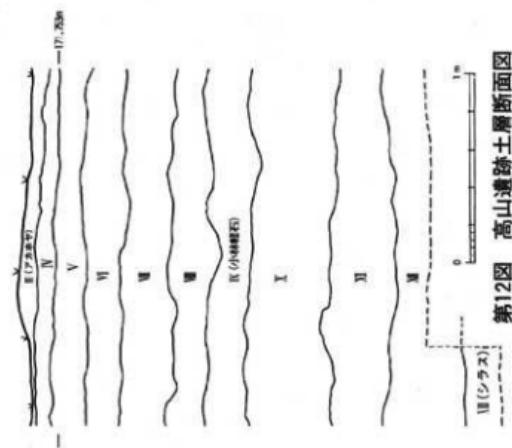
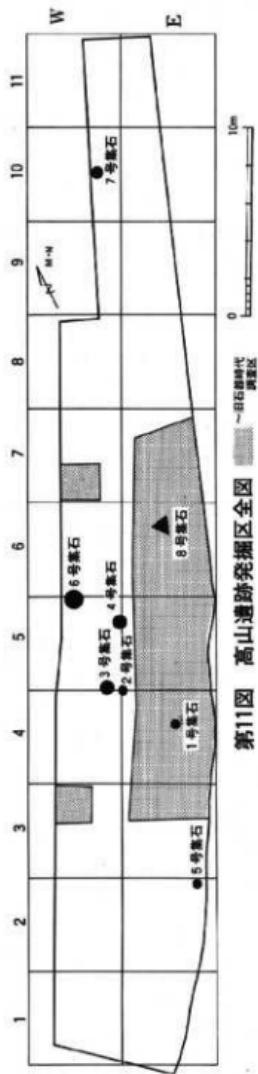
また、縄文時代の包含層の調査と並行して2m×2mのトレンチを設定しシラスまでの確認を行つたところ新村遺跡同様シラスの上層より黒曜石の剝片が出土したので3~7-E区を重機による掘り下げを行つた後、手作業に切り換えて調査を行つた。

その結果、旧石器時代の集石遺構1基と黒曜石の剝片が数点出土した。

包含層の状態

高山遺跡の基本層序は第12図に示す通りで、I層～耕作土、II層～明黄褐色土層、III層～アカホヤと続き、アカホヤ上層が若干異なるが、アカホヤ下層については堆積量の差があるほかは、新村遺跡とほぼ同一の層序を示している。

また遺物包含層もアカホヤと小林軽石の間の第V層～第VI層にかけて縄文時代早期の包含層が存在しており、また小林軽石とシラスの間の第XI層～第XII層にかけて旧石器時代の包含層が存在していることが確認された。



縄文時代

縄文時代の遺構と遺物は、新村遺跡同様アカホヤ層下位の第V層下部から第VI層にかけて確認された。

遺構としては、集石遺構が7基検出された。(第11図)これらの集石遺構のうち、1、6、7号集石は掘り込みを有するが、その他のものは掘り込みや配石等の痕跡は認められなかった。

1号集石(第16図)は直徑50cmの円形プランを呈し、底面に1枚の偏平な石を置きその周辺に花弁状に石を配石するもので4-W区において検出されたものであるが、旧道路面に存在したため集石の直上まで削平を受けており、上部に焼石の集積が存在した可能性も考えられる。

6号集石(第15図)は、本遺跡最大の集石遺構であり、5区と6区の境界で検出されたものである。規模は直径150cmの円形プランを呈する。掘り込み内には焼石が無規則に集積されており、掘り込み中央部には大形の河原石が1個置かれてあった。

遺物としては土器と石器が出土した。

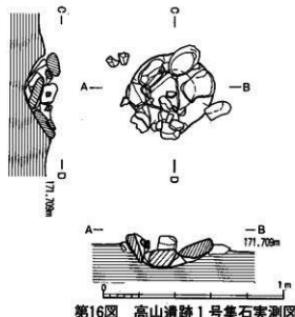
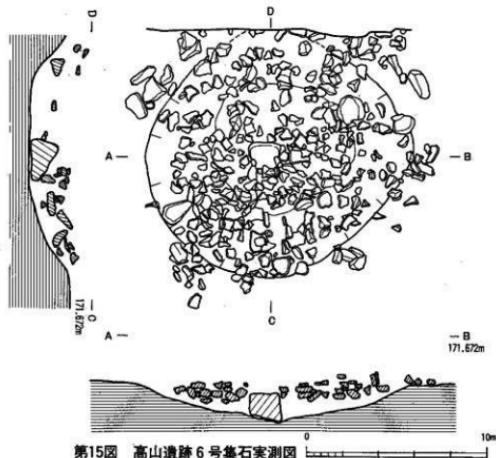
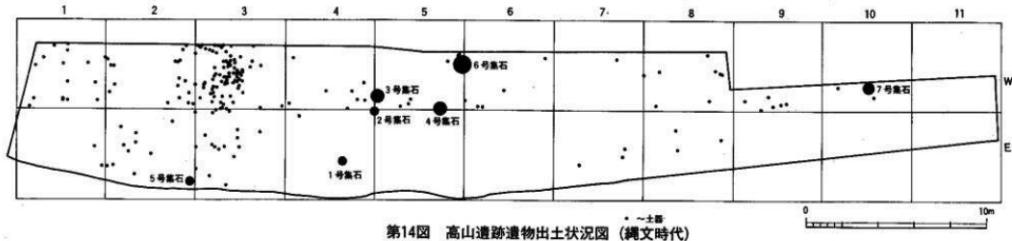
土器は調査区全体に出土したが、削平が著しかった5・6-E区には出土が見られず、3区に集中が見られた。(第14図)縄文時代早期の押型文土器を主体に貝殻文や燃糸文の土器も出土している。

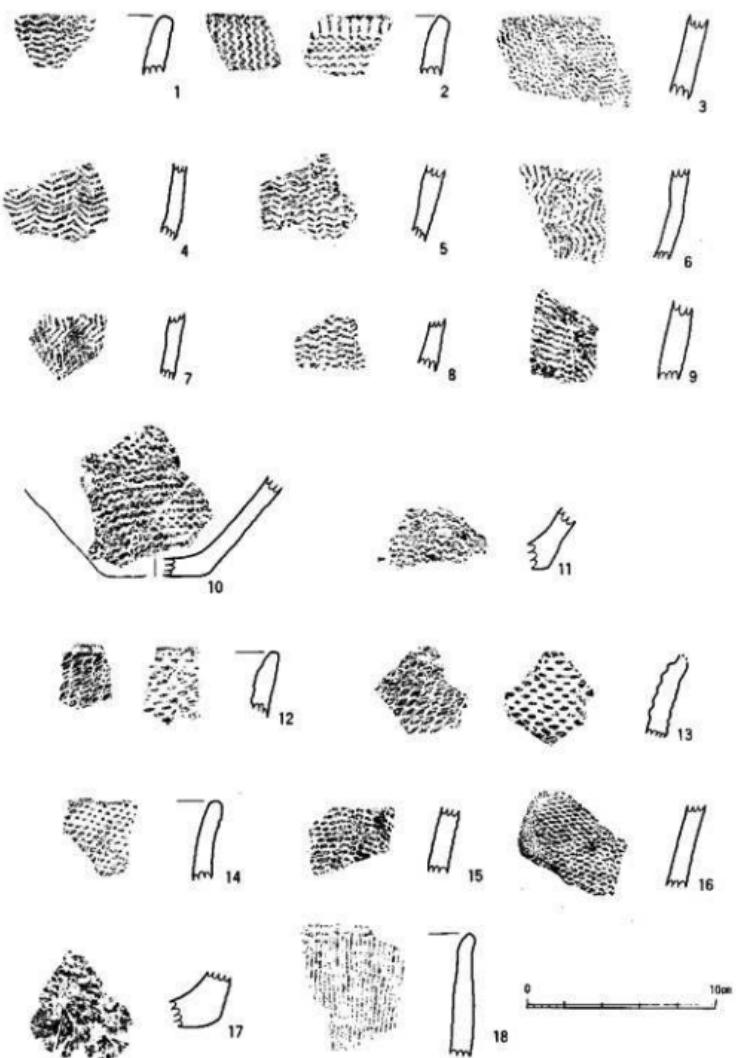
1~11は山形押型文土器である。1・2は口縁部片である。2は内面に原体条痕を有し、その下部に山形押型文が施されている。3~9は胴部片であり、10・11は底部片である。底部は10で見られるように平底を呈している。施文方向は1・4・5・8が横方向、2・6・7は縦方向、3・9は斜方向となっている。色調は浅橙色~橙色を呈し、焼成は良好である。

12~17は隋円押型文土器である。12~14は口縁部片であり、そのうち12・13は内面にも隋円押型文が施されている。15・16は胴部片で17は底部片である。外面の施文方向は14~16は縦方向であり、12・13は斜方向である。色調は浅黄橙色~明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

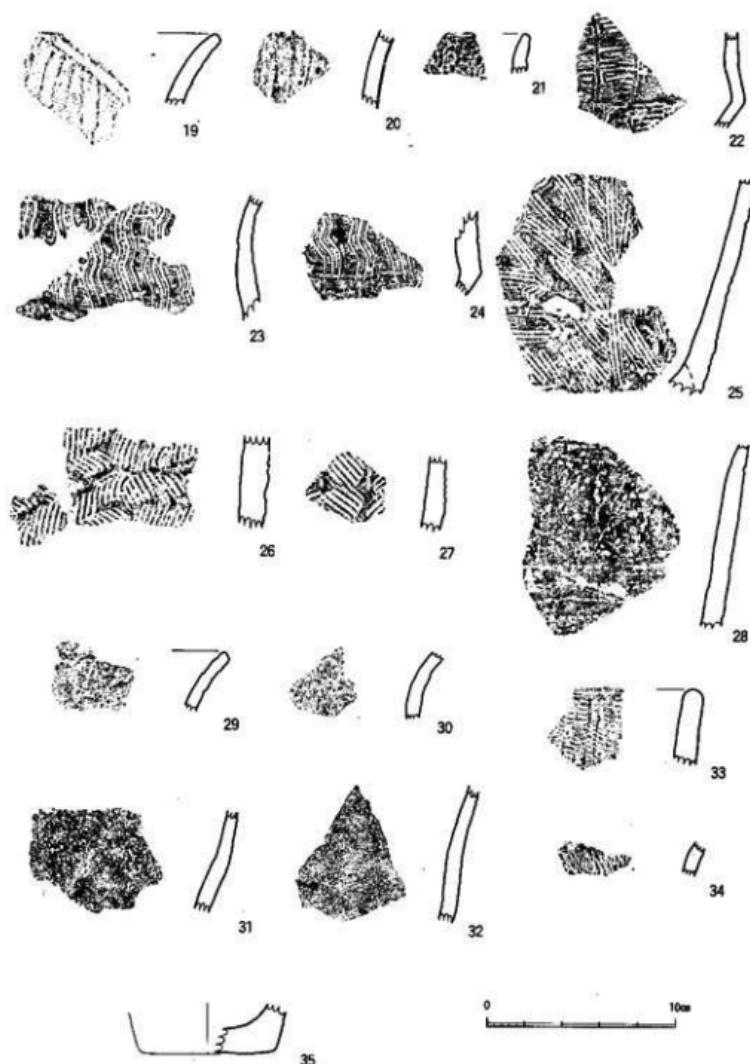
18は細格子目押型文土器の口縁部片である。口縁部は直行し端部が若干外反する。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

19~24は手向山式土器である。19~21は外面にみみずばれ状の突帯を有する土器





第17図 高山遺跡出土土器実測図・拓影(1)



第18図 高山遺跡出土土器実測図・拓影(2)

で、色調は褐色と呈する。22は細長い格子目状の浅い押型文を施すもので色調は灰白色を呈する。23・24は貝殻もしくは櫛状の施文貝で施された波状の沈線文を有する土器である。色調はにぶい橙色を呈する。

25～27は貝殻条痕文土器である。25は条痕の単位は長く、26・27は短く施文したものである。円筒土器である。色調は25はにぶい橙色を呈し、26・27は橙色を呈す。焼成は良好である。

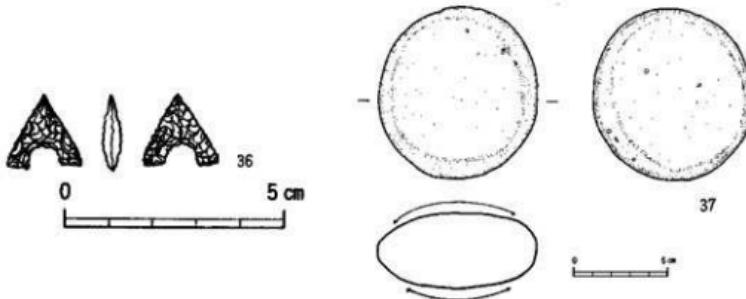
28～32は貝殻連点文土器である。28は円筒土器の胴部片であり色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。29・30は口縁部片である。文様は貝殻を浅く押圧した後に軽く器面に触れながら次の押圧を行ったと思われ、浅い条痕様の文様を有するものである。文様および胎土から判断して31・32も類似のものと思われる。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。

33は貝殻腹縁文土器の口縁部片である。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

34は撚糸文土器の胴部片である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

35は底部片である。平底で、無文である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

36は石鎌である。正三角形を基調とした抉りの大きい鍔形鎌である。漆黒で良質の黒曜石製である。37は磨石である。広い面を使用しており、石材は遺跡内に多く見られる砂岩ではなく火成岩の一種であろうと思われる。



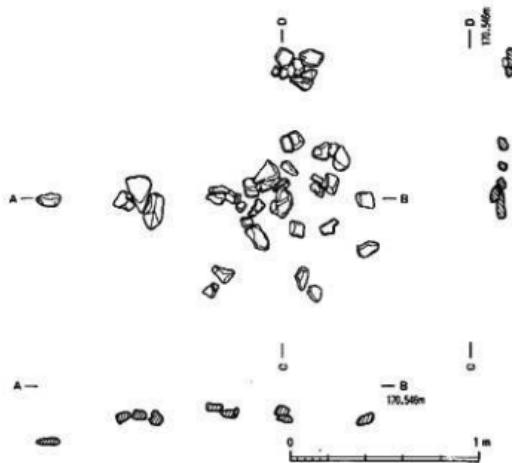
第19図 高山遺跡出土石器実測図

旧石器時代

旧石器時代の遺構と遺物は、新村遺跡と同様にシラス（Ⅲ層）直上の第XII～Ⅲ層で確認された。

遺構としては、集石遺構が1基検出された。集石遺構（8号集石、第20図）は6-E区のシラス直上において検出された。1m×1.5mの中に赤変した偏平な石が集中している状態であり、掘り込みや配石と呼べるようなものは存在しなかった。

遺物としては黒曜石の剥片が数点と焼石および若干の炭化物が出土した。



第20図 高山遺跡8号集石実測図（旧石器時代）

第3章 まとめ

今回の新村・高山遺跡の調査では、シラス上層において旧石器時代の集石遺構や剝片が確認され、アカホヤ層下位においては、縄文時代早期の集石遺構とそれに伴う押型文土器等が確認された。

旧石器時代の遺構・遺物について見ると、特に新村遺跡においては、南九州特有の厚く堆積した火山灰層の中のシラス（A.T.約22,000年前）直上の安定した土層の中からナフ形石器を中心同一石材と思われる剝片が数十点出土しており、狭い範囲ではあったが、かなりの石器の集中部分が調査できたと思われ、今後接合等により剥離技術の復元が可能になるのではと期待される。また高山遺跡においては、新村遺跡同様にシラス直上において集石遺構が検出されている。旧石器時代の集石遺構は、県内では佐土原町船野遺跡⁽⁷⁾・宮崎市堂地西遺跡⁽⁸⁾・田野町芳ヶ迫第3遺跡⁽⁹⁾・札ノ元遺跡等で検出されているが、各例とも明確な掘り込みが存在せず、本遺跡の集石遺構と同様であった。これらの集石遺構は掘り込みや配石を持つ縄文時代早期の集石遺構と異っており、今後集石遺構の機能等を考えいく上で重要な問題になると思われる。

また、県内における旧石器時代遺跡の発掘調査は從来日之影町出羽洞穴⁽¹⁰⁾や佐土原町船野遺跡⁽¹¹⁾など数例が知られるだけであったが、近年、宮崎学園都市遺跡群の調査を契機として田野町前平地区遺跡群⁽¹²⁾・延岡市赤木遺跡⁽¹³⁾・高鍋町妻道南遺跡⁽¹⁴⁾など相次いで確認されており、資料数も増加しているのが現状である。その中でも今回は宮崎県南部を占める諸県地方における初めての調査例であり、今後鹿児島県や熊本県の資料との比較検討を行う上で貴重な資料になると思われる。

また、縄文時代の遺構・遺物であるが、新村・高山遺跡ともアカホヤ下層に包含層が存在しており、出土遺物等から考えて縄文時代早期のものと考えられる。遺構としては、集石遺構が新村遺跡で1基、高山遺跡で7基検出されている。そのうち高山遺跡の1・6・7号集石は掘り込みを有するもので、特に1号集石は底面に偏平な川原石を配列してあるものであった。これらの集石遺構は、県内でも数多く検出されており、現在の所20ヶ所を超える遺跡で確認されている。特に田野町前平地区遺跡群では数百基の集石が検出されている。これらの集石遺構に対しては、形態分類やその編年作業も試みられている所である。また近年、集石遺構とその周辺に

散布する礫群との関係についても追及しようと試みられている所である。今回の調査においては狭い範囲ではあったが集石遺構周辺の礫に対してもポイントを落す作業を行っており、その関連性については今後の検討課題である。

縄文時代の土器に関して見ると、新村遺跡では数点の条痕文土器や撚糸文土器以外は押型文土器が主体をなしている。また高山遺跡でも、貝殻条痕文土器や貝殻連点文土器・撚糸文土器等が出土しているが、半分以上が押型文土器で占められている状況である。

この押型文土器は西日本各地に広域は分布を持つ土器群であるが、九州内における押型文土器の研究については、早い時期から賀川光夫氏らの手によって編年作業も進んでいる所である。「大分県史」によると、外面と口縁部内面に整然とした押型文をめぐらし、器形は尖底で口縁部に直線的に開く稻荷山式→器形はそのままで口縁部内面に短い原体刻文が施文される早水台式→口縁部がゆるく外反し、押型文が縦方向施文へ変る下菅生B式→口縁部が大きく外反し、胴部が張り、尖底・丸底・平底も見られ、文様は粗大な隋円押型文の縦方向施文と口縁部内面の原体刻文の長大化がみられる田村式→口縁部内面の原体刻文が消え、器形が長胴の深鉢状になり、平底が主体を占めるヤトコロ式→口縁部が大きく外反し、頸部でしまり、若干の稜線を有し、底部は上げ底気味の平底を呈し、文様は種々多様にわたり、口縁部内面に数列の押型文を施文するものもあり、押型文土器最終末とされる手向山式土器への変遷がたどられている。²⁰従って今回はこの編年の流れに沿って両遺跡の土器群を検討してみることにする。新村遺跡の土器群は、口縁部が外反し胴部の張りが目立ちだしている点、押型文が縦方向に施文されている点、口縁部内面に原体刻文が施されない点等から考えて早期後半に位置づけられているヤトコロ式土器に概当するものと考えられる。また高山遺跡においても主体をなす押型文は平底の底部が出土している点等から新村遺跡同様の様相であると思われる。それに加えて高山遺跡では、外面にみみずばれ状の突帯を有する。いわゆる手向山式土器の一群も出土しており、ある部分では新村遺跡より後出すると思われる。また少量ではあるが口縁部内面に短い原体刻文を有しその下部に押型文を施文するという下菅生B式と思われるような土器も見られた。これらの現象は単なる時期差だけではなく地域的なものを考えて今後検討していくかなければならない問題であろう。

また今回は、出土土器の主体をなす押型文土器に注目したが、地理的に見て、縄

文時代前期の曾畠式土器が出土した柿川内第1遺跡²²が同町内にあり、また高山遺跡出土の貝殻文土器の中には鹿児島県横川町中尾田遺跡出土土器²³と類似しているものもあり、県内はもとより西・南九州との関連も今後検討していかなければならない問題である。

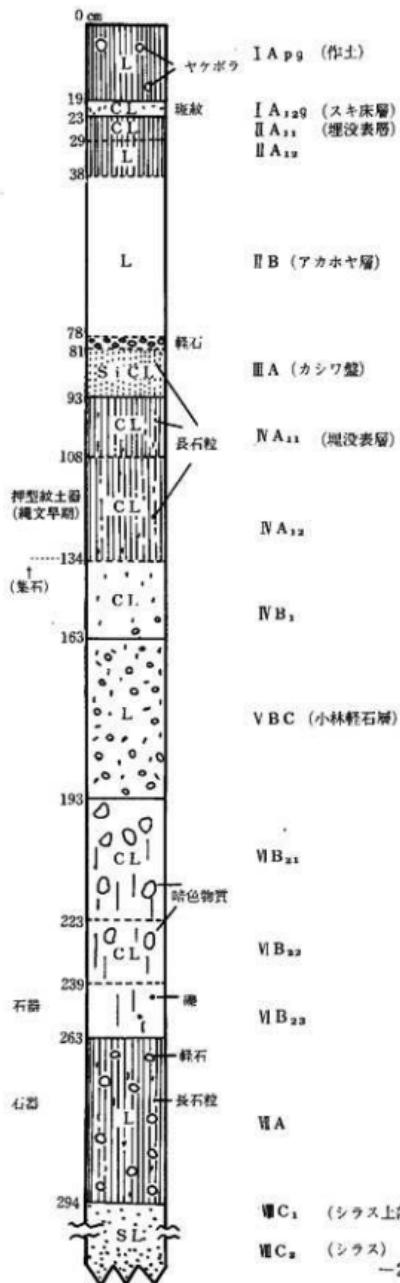
尚、現在集石内の礫については、奈良教育大学市川米太教授に熱ルミネッセンス分析を依頼している所である。

(註)

- (1) 文化庁「全国遺跡地図一宮崎県一」 昭和52年
- (2) 大迫氏(野尻町文化財保護審議会委員)の御教示による。
- (3) 面高哲郎「梯遺跡」「宮崎県文化財調査報告書第24集」 昭和56年
- (4) 宮崎県教育委員会「柿川内第I・II遺跡」 1976
- (5) 宮崎県教育委員会「大荻遺跡」 1974
- (6) 石川恒太郎「切畑地下式古墳発掘調査」「宮崎県文化財調査報告書第20集」 昭和53年
- (7) 橋昌信「宮崎県船野遺跡における細石器文化」「考古学論叢」
- (8) 永友良典「堂地西遺跡」「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集」 1985
- (9) 寺師雄二「芳ヶ迫第2・3遺跡・札ノ元遺跡」「田野町文化財調査報告書第2集」 1985
- (10) 鈴木重治「出羽洞穴」「日本の洞穴遺跡」平凡社 1967
- (11) (7)と同じ
- (12) (8)と同じ
- (13) (9)・面高哲郎「芳ヶ迫第1遺跡」「田野町文化財調査報告書第1集」 1984
- (14) 未報告であるが、永友良典氏の御教示による。
- (15) 未報告であるが、近麻協氏の御教示による。
- (16) 岩永哲夫・菅付和樹「宮崎県内の集石遺構(1)」「九州考古学第58号」 1983
- (17) (13)と同じ
- (18) 天瀬町教育会「平草遺跡」「大分県日田郡天瀬地区遺跡群発掘調査報告書」 1982
- (19) 阿部洋人他「縄文遺跡における『礫』の考古学的位置づけ」「古代文化36-12」 1984
- (20) 賀川光夫「九州東南部」「日本の考古学-縄文時代-」 昭和40年
- (21) 大分県「大分県史 先史篇I」 1983
- (22) (4)と同じ
- (23) 鹿児島県教育委員会「中尾田遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書19」 1981

野尻町新村遺跡における 土壤調査成績書

**昭和61年1月
宮崎県総合農業試験場**



調査年月日：昭和60年11月15日

調査場所：野尻町紙屋新村
漆野原水田

土壤群：多湿黒ボク土

土壤断面記載

I Ap_g 0-19cm、黒(7.5YR 3/4)色の
壤土(L)、作土層で、腐植に富
み、発達弱度の塊状～粒状構造を
示す。ヤケボラを含む。粘着性中、
透水性中で植物根にとむ。糸根状
斑紋あり。ち密度は、18mm、層界
はやや明瞭。

II A₁₂ 19-23cm、黒(7.5YR 3/4)色の
埴壤土(CL)、スキ床層で腐植
にとみ、発達中度の塊状構造を示
す。赤褐(5YR 5/4)糸根状斑紋
にとむ。孔隙あり、ち密度は、27
mmで、ち密である。

III A₁₁ 23-29cm、黒(7.5YR 1/4)色の
色の埴壤土(CL)、埋没表層、
腐植にすこぶる富む。

VI B₂₂ 孔隙にとみ、軽い。発達弱度の塊
状～小粒状構造、可塑性強、粘着
性強、透水性中、ち密度は21mm、
層界は漸変。

VI B₂₃ 29-38cm、暗褐(7.5YR 3/4-4/4)
色の壤土(L)、発達弱度の塊状
構造、腐植を含み、孔隙にとむ。
可塑性中、粘着性中、透水性中、
ち密度は24mmで上層よりかたい。
層界は漸変。

- Ⅱ B 38-81cm、明褐(7.5YR 5/6)色の壤土(L)、アカホヤ層で、発達弱度の塊状構造、ノコクズ状を示す。火山ガラスにとみ軽い。可塑性、粘着性極めて弱い。小礫あり、下部位(78-81cm)に、明褐(7.5YR 5/6)の軽石小粒あり、ち密度は22mm(上部位)~26mm(下部位)層界は明瞭。
- Ⅲ A 81-93cm、黒~黒褐(7.5YR 4/6~5/6)色の微砂質埴壤土(SiCL) カシワ盤、発達中度の塊状構造、小孔隙あり、白色小粒(長石粒)にとみ、かたい(ち密度28mm)可塑性強、粘着性強、透水性悪い。乾くと灰色味を示す。層界はやや明瞭。
- Ⅳ A₁₁ 93-108cm、黒(7.5YR 1/6)色の城壤土(CL)、埋没表層、腐植にとみ、発達弱度の塊状構造を示す。白色粒(長石粒)を含み、小孔隙あり、かるい、ち密度は24mm可塑性強、粘着性強、透水性中、層界は漸変。
- Ⅳ A₁₂ 108-134cm、黒(7.5YR 3/6)色の埴壤土(CL) 腐植にとみ、発達中度の塊状構造でかるい、孔隙にとみ、ち密度は26mm、可塑性強、粘着性強、透水性中、繩文早期土器出土層、層界は漸変。
- Ⅴ B₁ 134-163cm、黒褐(7.5YR 5/6)色の城壤土(CL)、腐植含み、発達弱度の塊状構造、白色小粒(長石粒)軽石小粒を含む。小孔隙にとむ。可塑性中、粘着性中、透水性中、ち密度25mm(乾くと28mm)層界は、やや明瞭。
- V B C 163-193cm、暗褐(10YR 4/6)色の壤土(L)、腐植を含まず。中(2~3cm)~小粒(5~8mm)の風化軽石や明赤褐~黄橙(5YR 6/6~10YR 5/6)白色小粒(長石粒)、灰色小風化礫にとむ(小林軽石層)、小孔隙あり、可塑性中、粘着性中、透水性不良、ち密度は29mm(乾)でち密。層界は漸変。
- VI B₂₁ 193-223cm、褐(7.5YR 5/6)色の埴壤土(CL) 腐植なし、発達中度の塊状構造。小孔隙にとむ。ほぼダ円状(4×4cm大)の暗色物質を多く含む。白色小粒(長石粒)黄灰(2.5Y 5/6)色小礫、明赤褐(5YR 5/6)色小礫にやや富む。かたい。可塑性強粘着性強、透水性難。ち密度は28(乾)層界は漸変。
- VI B₂₂ 223-239cm、褐(7.5YR 5/6)色の埴壤土(CL) 発達中度の塊状構造、腐植なし、小孔隙にとむ。白色小粒(長石粒)、灰色小礫を含む。灰黄褐(10YR 5/6)色小礫は、上層より少ない。上層よりやわらかい。可塑性強、粘着性中、透水性中、ち密度は、25mm、層界は漸変。
- VI B₂₃ 239-263cm、褐(7.5YR 5/6)色の埴壤土(CL) 腐植なし、発達弱度の塊状構造、白色粒(長石粒)、灰色小礫を含む。石器出土層、層界は明瞭。

- V II A 263-294cm、褐～暗褐(7.5Y R 5%～10 Y R 5%)の混色の壤土、発達弱度の塊状構造。高積あり、白色小粒(長石粒)、黄灰(2.5Y 5%)色小礫を含む。明褐色～橙(7.5Y R 5%～5%)色の風化軽石粒を含む。小孔隙あり、上層よりかたい。ち密度は27mm、石器出土層、層界はやや明瞭。
- 層 C₁ 294-320cm、黃褐色(2.5Y 5%)色の砂壤土(S L)、構造未発達、上部に明黄色(10 Y R 5%)色の風化軽石小粒あり、腐植、礫なし、やわらかい、ち密度は25mm、最下層は白色シラスとなる。

土壤断面の記載に関する解説

1. 土 壤 群：断面形態の主な特徴および母材、分布する地形などについて共通点をもつて一連の土壤統をまとめて土壤群とする。たとえば本断面は多湿黒ボク土（土壤群）（黒ボク水田をさす）一表層多腐植質多湿黒ボク土（土壤統群）一畦原統（土壤統）（30~60cm以下にアカホヤ層あり、埋没腐植層あり）となる。
2. 土 壤 断 面：断面にみられる土壤層位の配列は層位分化の原因となった土壤生成過程を反映している。
3. 土壤層位の区分：一般に土壤断面は上から順にA層、B層、C層などの3つの主層位から成立している。
 - (1) A 層：腐植で暗色に汚染され、有機物が無機物と結びついた腐植が多量に集積している層で、この層の質的特徴と形態的特徴（土色、構造など）によって細分するときはA₁, A₂のように記す。
また、補助記号として、p(作土層で、plowingの略)、g(斑紋の存在)を用いて、水田の作土層はAp_g、また、畑の作土層はApで示される。
 - (2) B 層：A層とC層の中間に位置し、母材の風化により生成された遊離鉄によって赤褐色、褐、黄褐色を呈する風化層、あるいはA層から、洗脱された物質の集積層で構造が発達していることが多い。
B₁層はA層とB層の漸移層でB層の性質が優越している層である。形態的特徴（土色、構造、土性など）により、B₂層また、B_{2a}、B_{2b}などに細分される。
 - (3) C 層：風化作用を受けてろくなっているが母岩の組織を残している。土壤化はほとんど進行せずに無構造、いくつかの層に区分されるときは上から順にC₁、C₂……のように細分する。
 - (4) 埋没層：現在の土壤下に埋没した土壤については現在の土壤をⅠA、ⅠB、ⅠC、埋没土をⅡA、ⅡB、ⅡC…以下Ⅲ…、Ⅳ…とする。
4. 野外土性の判定：土性は土壤断面の層位間の比較、風化の程度、異種母材の判定などの重要な目安となるので、現場で手ざわりや肉眼的観察によってだいたいの判定（野外土性という）を行う。（表1参照）

表1 野外土性判定の目安

判 定 法	土性名と略号
ほとんど砂ばかりで、ねばり気を全く感じない。	砂土 (S)
砂の感じが強く、ねばり気はわずかしかない。	砂壤土 (S L)
ある程度砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる。	壤土 (L)
砂はあまり感じないが、サラサラした小麦粉のような感触がある。	シルト質壤土 (SiL)
わずかに砂を感じるが、かなりねばる。	埴壤土 (C L)
ほとんど砂を感じないで、よくねばる。	重埴土 (H C)

5. 土色の判定：土色を調べようとする層位のなかから、代表的な色調の部分から適当な大きさの土塊をとり、標準土色帖を使い、土壤の色と一致する色片をさがす
土壤の色と一致する色片が決ったら色相、明度／彩度の順に並べ黒(7.5Y R 3/1)のように記載する。
6. ち密度：硬度計（山中式硬度計）を用いて平滑に整えた土壤断面に対し、直角の方向に硬度計を押しあて、その円錐部のつぼが土壤面に密着するまで、ゆっくり水平に保ちつつ押し込み、その貫入の深さを数値mmで読み、その平均値で示す。
7. 可塑性(表2)：可塑性とは、力を加えていくと変形し、力を除いたときその変形を保持する能力を表わす。野外での判定は、土壤を親指と人差指の間にこねまわし、線状や細い棒状の形にできるかどうかによっている。
可塑性の強弱の区分は、土壤に充分な湿りを与え、親指と人差指との間にこねて粒団を壊し、こねている間に水分が蒸発し、土が指に付着しないようになったときに棒状にこねのばし、その状態を次の基準によって区分する。

表2 可塑性の区分基準（農林省、1961）

区分	基 準
なし	全然棒状に延ばせないもの。
弱	辛うじて棒状になるが、すぐ切れてしまうもの。
中	直径2mm内外の棒状に延ばせて、こね直すのに力を要しないもの。
強	直径1mm内外の棒状に延ばせて、こね直すのにやや力を要するもの。
極強	長さ1cm以上の極めて細かい糸状に延ばせて、こね直すのにかなりの力を要するもの。

8. 粘着性：粘着性とは、土壤を親指と人差指の間で圧して引きはなすときの付着する性質をいっている。粘着性が最大になるまで水分を与え、親指と人差指との間の付着性の強弱によって次のように区分する。

表3 粘着性の区分基準（Soil Survey Staff, 1951）

区分	基 準
なし	土壤がほとんど指に付着しない。
弱	土壤が一方の指に付着するが、他の指には付着しない。指をはなすとのびない。
中	両指頭に付着する。指をはなすと、多少伸びる傾向をもつ。
強	指頭に強く付着する。指をはなすと伸びてくる。

(有 村 玄 洋)

図 版

図版1



新村遺跡遠景（東から）



新村遺跡発堀区全景（北から）

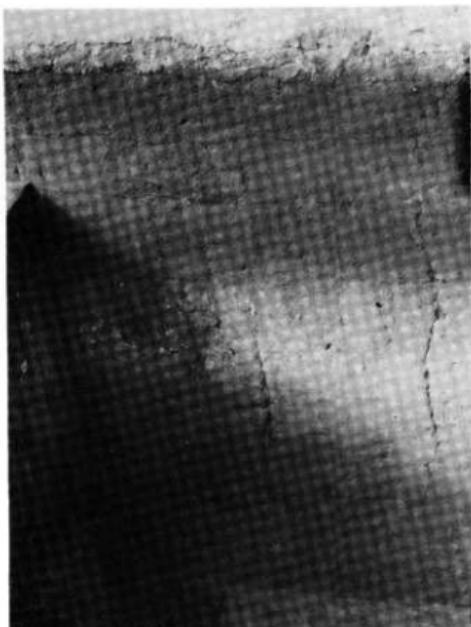
図版 2



図版 3

高山遺跡土層断面

←アカホヤ



←小林輕石

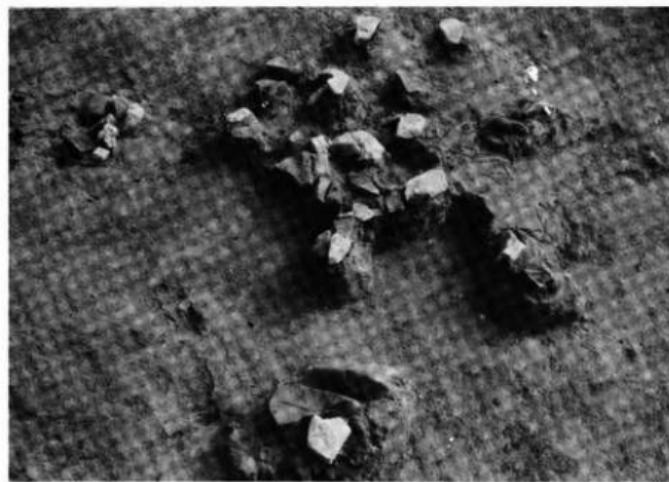


高山遺跡 1号集石

図版 4

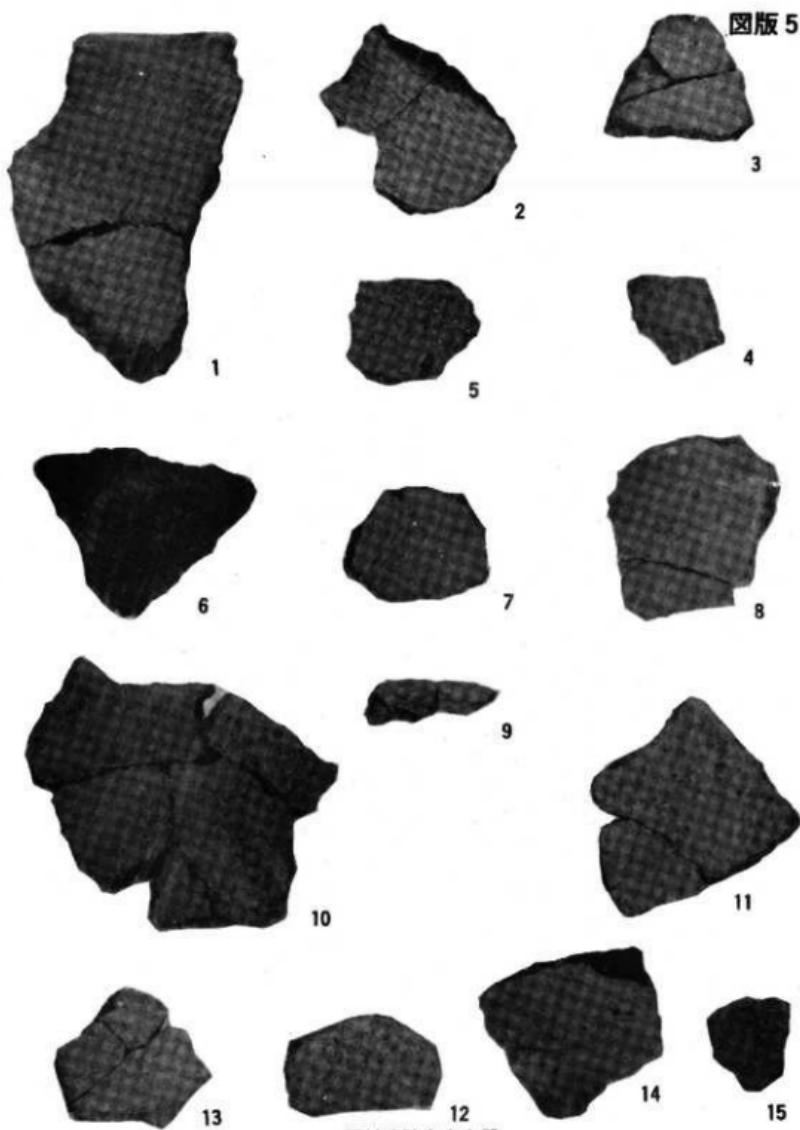


高山遺跡 6号集石



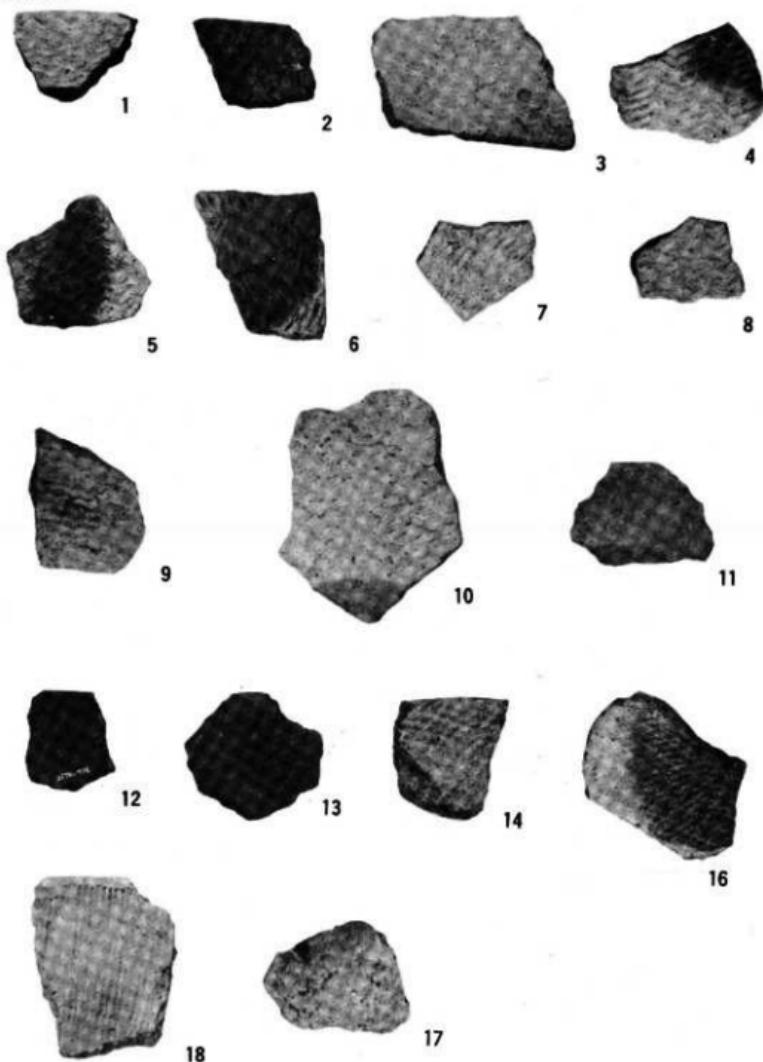
高山遺跡 8号集石

図版 5



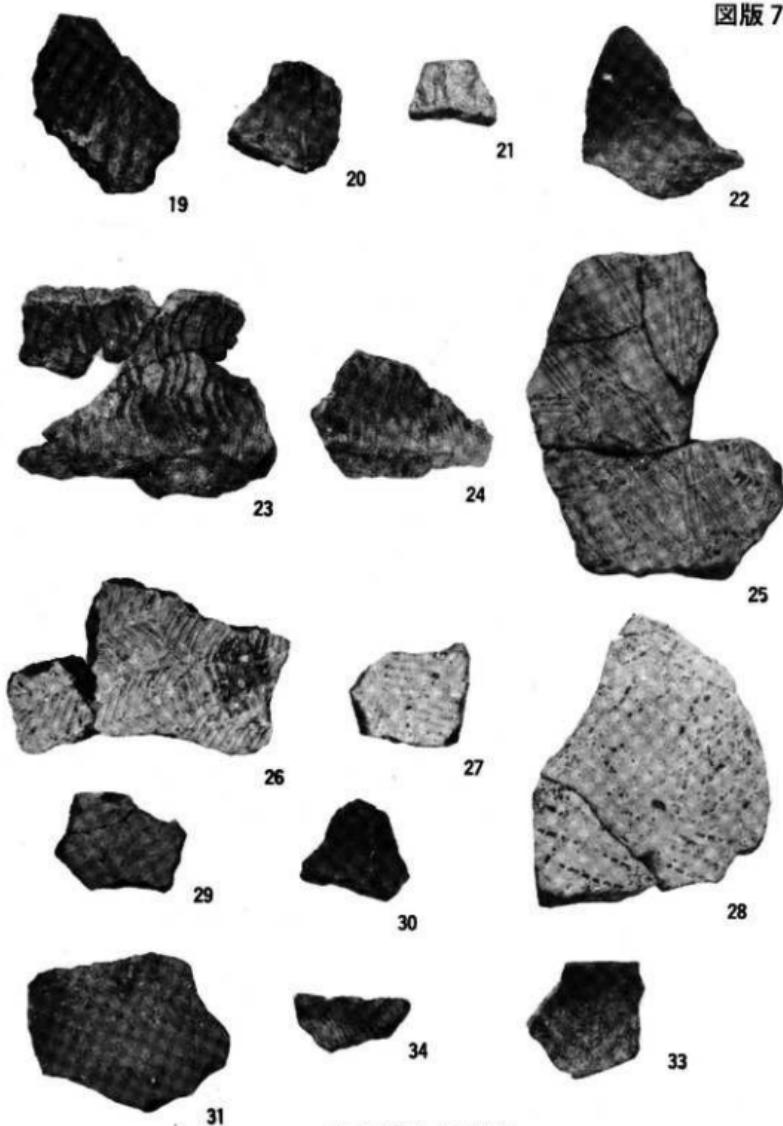
新村遺跡出土土器

図版 6



高山遺跡出土土器(1)

図版 7



高山遺跡出土土器(2)

図版 8



新-17



高-37



新-16



高-36



新-18



新-19

新村・高山遺跡出土石器

新村遺跡
高山遺跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

発行年月 昭和61年3月

発 行 野尻町教育委員会

印 刷 江口印刷

野尻町大字三ヶ野山4388-2